

Title	朝鮮古美術寫眞集(田野寫眞館)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.3 (1926. 7) ,p.145(451)- 146(452)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260700-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る一證に過ぎないが、數理統計學の泰斗ピアソンの如きも、その業績中に、常に小金井老博士のアイヌ研究を土臺として計出した種々な數理上の價値を使用してゐる。之を見てもその計測の如何に精確なるかを推測される。尙之を證明する事實は他にもある。我が東京帝大の醫學部紀要は寄贈されて、ブリチツシ・ミュージアムの附屬圖書館に全部そろへられてあるが、その内第二卷文は、著るしく手あかに染められてゐるのを見るといふ。この第二卷といふのは、即ち前述したアイヌの研究である。つまりその論文の學界に重きをなしてゐると同時に、その計測の模範的であるを告げるものである。アイヌ研究は公表されてから、既に三十年を経過してゐる。それでも諸學者が貴重な業績として引用參考する。凡そ著述は壽命の永きを貴しとするのである。大部でむづかしいばかりが良いのではない。短篇でも壽命が長く、後世までも重寶がられるものがある。英國においてはワン・ペンニーの書籍に賣れ行きの良い、しかも卓説を載せたものが多いと聞く。今より六十餘年前に出版されたハックスレーの名著「自然における人類の位置」の如きも長篇ではない。しかもその一部は徒弟に試みた通俗講演である。然るに今でも専門家は卓説として引用してゐる。本書も筆細かなるが上に、極めて平易に書かれてゐる。この點において我々後學は大いに學ぶ所がある。

本書に收むる日本石器時代人民に見る齒牙變形の如きも、老博士なればこそ、能く之を發見されたものであると思はせる。石器時代人骨の研究に没頭されてからは、可なり久しい年月がたつてゐる。従つて集められた資料は豊富である。けれどもこの種の研

究は、近年になつて大に注意されて來た結果長足の進歩を遂げた。従つて、老博士の集むる資料に匹敵するもの、あるひは寧ろそれよりもより多數の材料は、諸所に集まつて來た。それでこの發見後之等の材料を點檢すると、それと同じ例は澤山に擧がつて來る。けれども老博士の慧眼は、諸氏に先んじて、この研究のバイオニアたるの名譽を博したのである。この發見の徑路に就ては、別に論文に詳しい記述はない。けれどもどうしてかゝる發見をされるやうになつたか、もちろん眞似の出來ようはずもないが、何だか詳しいその徑路が知りたいやうな氣がする。

附録「島めぐり」は前述したアイヌの研究を大成すべく、明治二十二年の夏、北海道を隈なく旅行された時の紀行で、之を令夫人小金井喜美子女史の流麗微妙な筆にのせて、もらさず餘さず、能く精細を描出したものである。

載する所の四十の論文の何れを通讀しても、上述したやうな細密な、そして忠實な點とがうかがはれる。だからたゞに論說として有益に讀了するばかりでなく、研究の態度を學ぶ點において少からず後學を指導する貴さを有つてゐると思ふ。(松村瞭)

朝鮮古美術寫眞集 (田野寫眞館)

日本古代の文化、殊にその美術工藝品を顧みるときは、必然に眼を大陸に向けねばならぬ。その大陸の影響をわが國に及ぼしたものは朝鮮であつた。従つて朝鮮の古美術の研究は、一方大陸の、他方わが國の古美術研究に至大の關係を有し、殊に最近樂浪古墳

の發掘は、朝鮮の古美術に對する研究に益々その重大性を加へたのである。しかるに從來この方面に關して寫眞や印刷物が甚だしく、研究者をして甚しき不便を感じしめたが、今般總督府博物館の藤田亮策、小泉顯夫兩氏が主任となつて、三國以來の佛教藝術を初め、古墳の遺物、有史以前の遺物、陵墓、殿廟、塔碑、石人石馬等の彫刻等、學問上からも藝術上からも貴重なる材料となるべきものを、總督博物館、李王家博物館、或は個人の珍藏品より撰擇して、それに一々説明を附し、中版寫眞版十枚一組として、毎月發行されることになつたのは、研究者にとつてこの上もなき幸と言はればならない。すでに三輯まで發行され、その中には石器時代の土器文様を始めとして、樂浪古墳の出土品、或は慶州石窟庵の本尊など多くの珍しきものが包含されてゐる。(松本芳夫)

綜合日本史概説 上卷 (栗原元次著 中文館書店)

著者は本書の緒言において、わが國史が世界無比として誇り得べきにかゝはらず、現代の國民がこの光輝ある國史の成迹を忘却せんとしてゐることを慨き、智識階級にしてその國史に迂なること現時の我國の如きは世界においても稀にみるところなることを説き、その原因の一つが教養ある一般人士に適する國史の良書に乏しきためであるとなし、この缺陷を補ふとともに、中等以上の學生や中等教育に従事するもの、參考に供せんがために本書をなしたのであつて、その記述は時代の下るにつれて稍詳しく、また政治、法制、戦争、文化等の一方面に偏らないやうに注意し、全

體としての國史を説くにつとめたことを述べられた。かくて本書においては、國土及び國民をもつて章を起し、第三十九章豊臣時代の外國關係に筆を擱き、所々に鮮明なる寫眞版と圖解とをもつて興味と理解とを助けてゐる。さうして温健なる見解の下に、よく史實を統一整齋せる點において、その目的に成功せるものと言ふことができよう。但し吾々が一般讀者として本書をみるとき、そこになほ多少の希望もないではない。例へば黃泉國の意義説明せらるゝ以上は、高天原についてはそれ以上にその意義を説明せられたい。或はまた應神朝の歸化人の場合における百二十縣とか十七縣の縣の如きについても註記せられたい。一般讀者の立場からみて本書の性質上簡單なる説明を要求したい事項は其他にも多く存在する。なほ鎌倉時代の宗教において、一遍上人をあげて融通念佛を説明してゐるけれども、融通念佛としては平安朝の良岡上人をあぐべきではなからうか。しかし慾を言へば限りはない。ついで現はれるであらう下巻とともに、國史の良き參考書として推奨し、著者の努力を多とするものである。(松本芳夫)

中世に於ける精神生活 (平泉澄著 至文堂發行)

本書は國史研究叢書第一編として公にされたものであつて、平泉氏の帝國大學に於ける講義案を基としたものである。

此處に中世と言ふは、保元以降室町幕府の滅亡まで、即ち武家武門の興起して公家を壓倒してより、信長の足利氏を追放した天正元年までである。此の時代は後世の人々より暗黒時代と呼ばれ